持田中尾遺跡

MOCHIDA-NAKAO SITE

発掘調査概要報告書

1982

高鍋町教育委員会

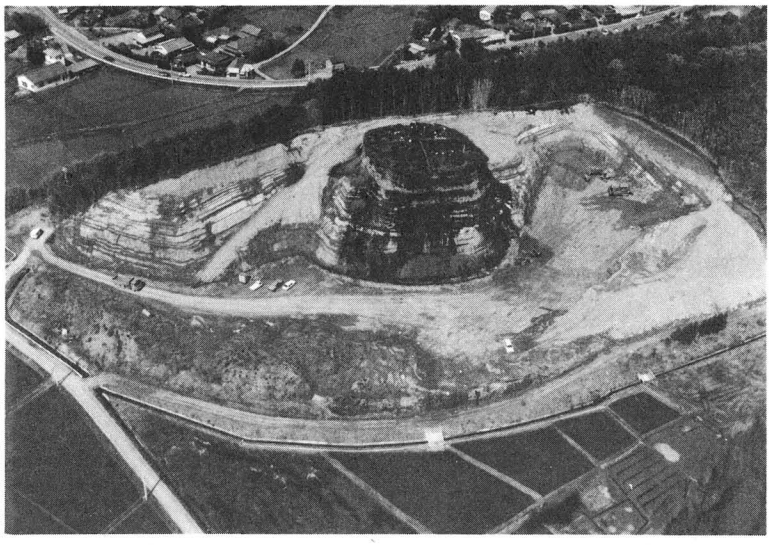
持田中尾遺跡

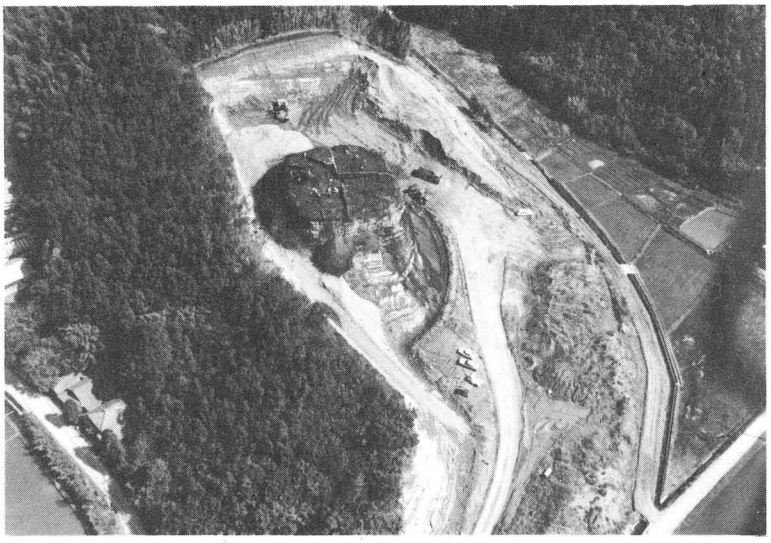
MOCHIDA-NAKAO SITE

発掘調査概要報告書

1982

高鍋町教育委員会





序

高鍋町周辺のこの地方には多くの古墳が現存しているが、その中心をなすのが持田古墳である。持田古墳群は、いまわしい歴史的恥部をもっている。昭和初期における盗掘事件がそれであり、五世紀から六世紀にかけて築造されたといわれる持田古墳85基に及ぶ前方後円墳、円墳のすべてが盗掘され破壊されたことである。心ない人々の行為によって失われた貴重な文化財の散逸は残念というほかはない。こうして汚染された過去から良識が生れ、昭和50年持田古墳群地帯の住民が中心となって高鍋町全域に呼びかけられて「高鍋町古墳を守る会」が結成され、保存顕彰事業が積極的にすすめられていることは関係者一同の深く喜びとするところである。

今回、持田古墳群の最南端部の傾斜部にかかろうとする一角で発見された古墳は、開発工事中の発見であるが、この地域が既に埋蔵文化財周知地域であることから慎重を期し注意と関心を払っての工事であったことが発見に結びついたものと資料する。

幸い宮崎県教育委員会の全面的な御指導・御援助のもとで慎重かつ綿密な調査が完了し、貴重な資料が得られたことは望外のよろこびである。末尾になりましたが御協力賜りました宮崎県教育委員会に心から感謝し、厚く御礼申しあげる次第であります。

昭和57年４月

高鍋町教育長　日　高　　俊

例　　言

1．本書は株式会社大林砂利の砂利採掘事業に伴い、高鍋町教育委員会が実施した持田中尾遺跡の発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、昭和56年３月２日から昭和56年４月23日まで実施した。

3．調査関係者は次の通りである。

調査主体	高鍋町教育委員会	
教育長	日　高　　俊	
社会教育課長	松　井　克　興	
同課長補佐	本　部　　寛	（文化財担当）
調　査　員	北　郷　泰　道	（県教育庁文化課主事）

4．発掘調査は北郷が担当し、県教育庁文化課小森達郎、永友良典、山中悦雄、菅付和樹の協力を得た。

5．長津宗重、有田辰美、高橋加奈子の各氏には遺構の実測・測量等について援助を受けた。

6．本書の執筆・編集等作成にかかわるすべては北郷が行った。

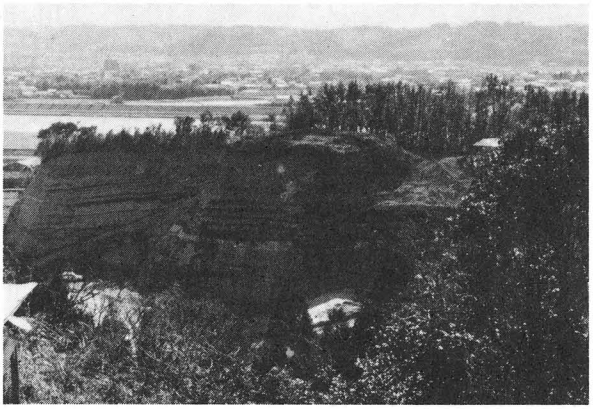
7．カラー口絵の航空写真は航空自衛隊新田原基地の協力・提供になるものである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　説 …… 1
　1．発掘調査に至る経緯 …… 1
　2．遺跡の立地と環境 …… 1
　3．発掘調査の経過と概要 …… 4
第Ⅱ章　墳丘と包含層の状態 …… 8
第Ⅲ章　先土器時代 …… 10
第Ⅳ章　縄文時代 …… 11
第Ⅴ章　弥生時代　―遺構と遺物― …… 12
第Ⅵ章　古墳時代 …… 27
第Ⅶ章　結　　語 …… 29

第 Ⅰ 章　序　説

1，発掘調査に至る経緯



Pl.1　遺跡全景

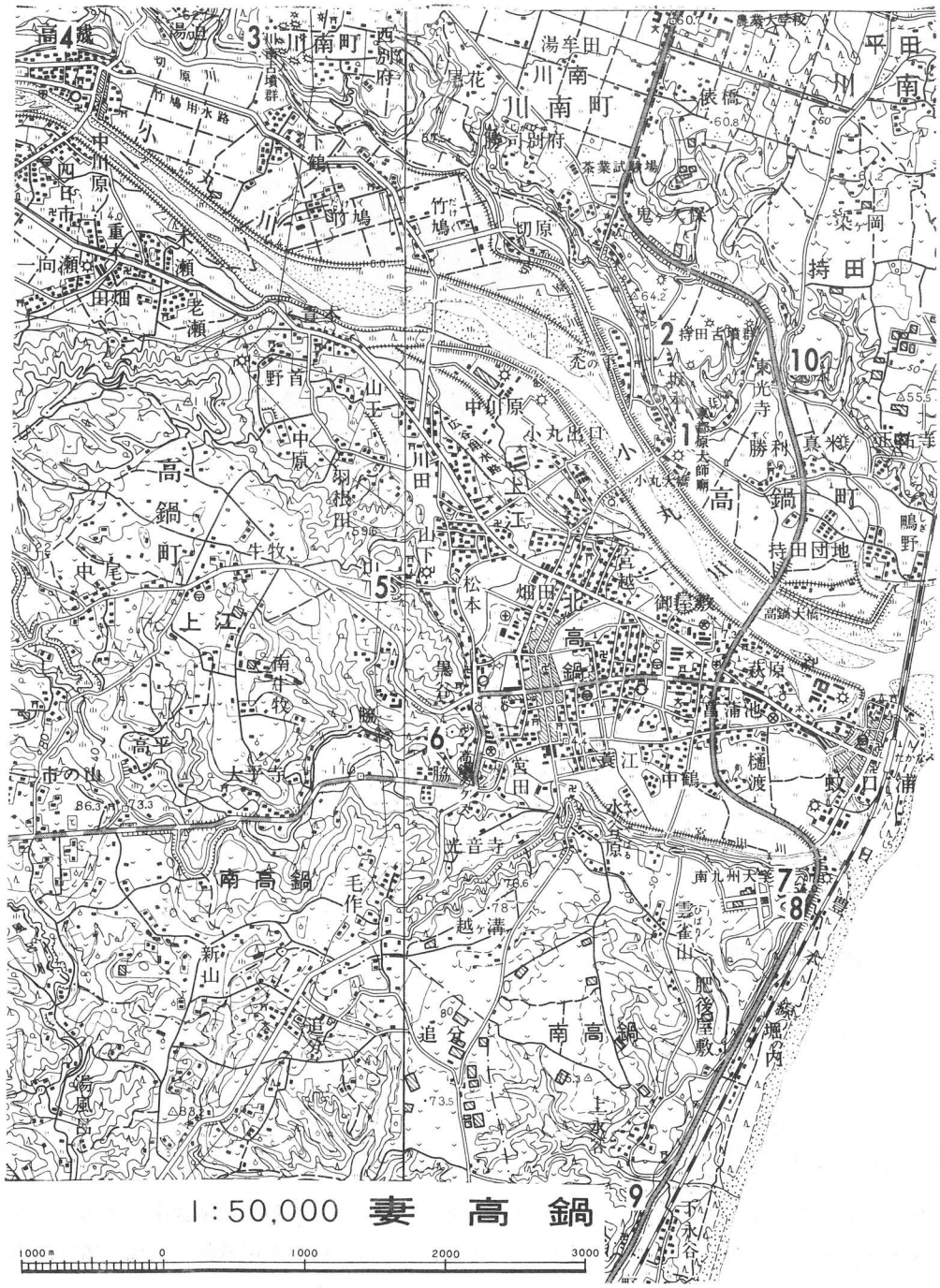
高鍋町教育委員会は、国指定史跡持田古墳群の立地する台地の一角が株式会社大林砂利の砂利採掘工事により削り取られていることから、県教育委員会に現地確認調査を依頼した。県教育庁文化課主任主事小森達郎、岩永哲夫は昭和55年４月26日に現地確認調査を行い、削り取られている台地中央部が高塚古墳であることを確認した。同台地が持田古墳群の一角に位置することから取り扱いについては慎重な協議を重ねたが、既に断崖状に掘削され現状保存が困難であり、かつ危険な状態にあることなどの判断から高鍋町教育委員会が調査主体となり、緊急発掘調査を実施することになった。

発掘調査には当初県総合博物館主任茂山　護、県文化課の岩永を予定したが、調査時期が大幅に遅れたことから、県文化課主事北郷泰道が急遽当たることになった。又、史跡持田古墳群に近接し、その関係にも注意を要することから県文化課の史跡担当である小森の援助を受け、昭和56年度に入ってからは土層剝ぎ取り作業のため県文化課主事永友良典、菅付和樹の援助を得た。

2，遺跡の立地と環境（第１図）

持田中尾遺跡（第１図１）は、国指定史跡持田古墳群（第１図２）の立地する台地の一角に位置している。持田古墳群は小丸川左岸の国道10号線を挟む標高30m ～50m の台地上に立地しているが、主要な古墳は国道10号線の西側の台地に分布している。指定基数は85基で、その内10基が前方後円墳である。

持田古墳群の中で古式に属するものは、第１号墳（計塚）と第48号墳で、第１号墳は台地の最も西側の小丸川を西方に望む縁辺に立地し、それに対し第48号墳は南に突出した舌状の丘陵先端部に小丸川を南方に望む形で立地している。持田中尾遺跡の高塚古墳は円墳ではあるが、第48号墳の位置する丘陵の西に同じく舌状に突出した丘陵地の最先端部に位置し、立地的には古い要素を持つものであることが考えられた。



第１図　遺跡所在地図　（Ｓ＝1/50,000）

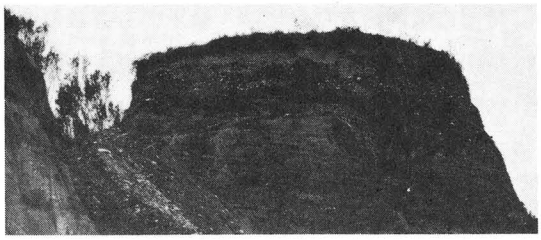
持田古墳群を含む台地は、県下でも有数の遺跡群の所在する所としても知られ、群内には持田西ケ原遺跡、関所遺跡などが点在している。しかし、その実体はさほど明らかとはいい難く今後に多くの課題を残しているが、国道10号線の東側の台地上に所在する上別府遺跡（第１図10）は、ほ場整備事業に伴い昭和54年８月に発掘調査され９箇の竪穴住居跡が検出されている。上別府遺跡の年代は６世紀を中心とするもので、持田古墳群営造に関わる時期の注目すべき遺跡であった。

こうした小丸川下流域の台地は中流域へと広がり、川南古墳群（第１図３）は指定古墳55基の内前方後円墳が10基と前方後円墳の密度の高さで注目されると共に、最近の発掘調査例では円形・方形周溝墓の存在が川南古墳群の北方に広がる台地平担面に確認されつつあり、県下でも稀有の高塚古墳群地帯を小丸川左岸に出現せしめた歴史的背景に一つの解決を与えようとしている。

さらに小丸川を上る木城町においては、昭和56年６月に横穴式石室をもつ木城町永山古墳（第１図４）が発掘調査され須恵器・土師器をはじめとする良好な副葬品が検出されている。横穴式石室の確認例の少ない県下では貴重な成果として評価出来る。

1．持田中尾遺跡	6．舞鶴城跡
2．持田古墳群	7．ひばり山貝塚
3．川南古墳群	8．狐塚古墳
4．永山古墳	9．下永谷横穴群
5．牛牧遺跡	10．上別府遺跡

3，発掘調査の経過と概要



PI.2　遺跡近景

遺跡は発掘調査に着手した時点ですでに、突出した丘陵地の東側大半を掘削され、円墳と思われる部分が円筒状に残され、西側丘陵縁辺部がわずかに残されているという、極めて劣悪な状態としか言い様のないものであった。従って、調査の対象は円墳と思われる円筒状の残地と西側丘陵断面の南北二箇所に確認された溝状遺構の残存部分に限られた。掘削に当ったブルドーザーのオペレーター等の話でも、既に失われた丘陵地部分及び溝状遺構部分から多くの土器の出土がみられたといい、それを黙殺して事業を進めた工事関係者の良識を疑わざるを得ない。

ともあれ、昭和56年３月２日から同年４月23日までの７週にわたり実施した発掘調査の経過と概要を次に週を追って記したい。

〈第１週〉　３月２日～７日

発掘調査はまず磁北で四分割し、四分法で掘り進めることにした。四分割した各区はＮＥ・ＮＷ・ＳＥ・ＳＷ区とし、その内ＮＥ区及びＳＷ区にＬ字形のトレンチを設定し発掘をはじめた。表土剝ぎを終えた段階から、弥生土器片の出土がおびただしく、磨石・石錘等石器類の出土もまたおびただしいものがあった。

〈第２週〉　３月８日～14日

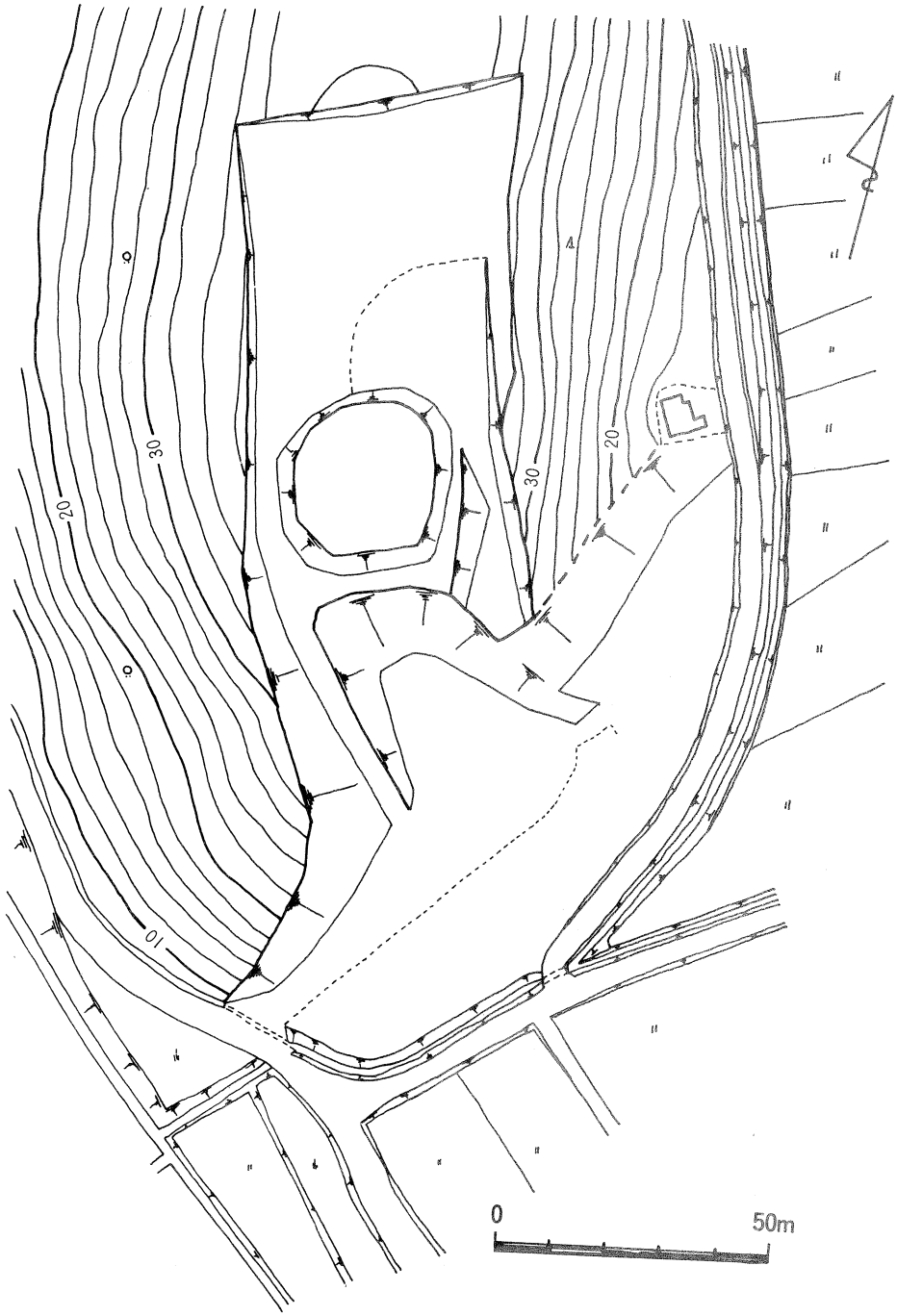
埋葬主体部の検出を中心に層ごとの精査を繰り返したが、多量に出土する土器類のため作業がはかどらない。ＳＷ区において人頭大の河原石の散乱がみられたため、平面的にＳＷ区を剝ぎ河原石の散布状態を検出した。しかし、その散布自体には規則性は見出せなかった。

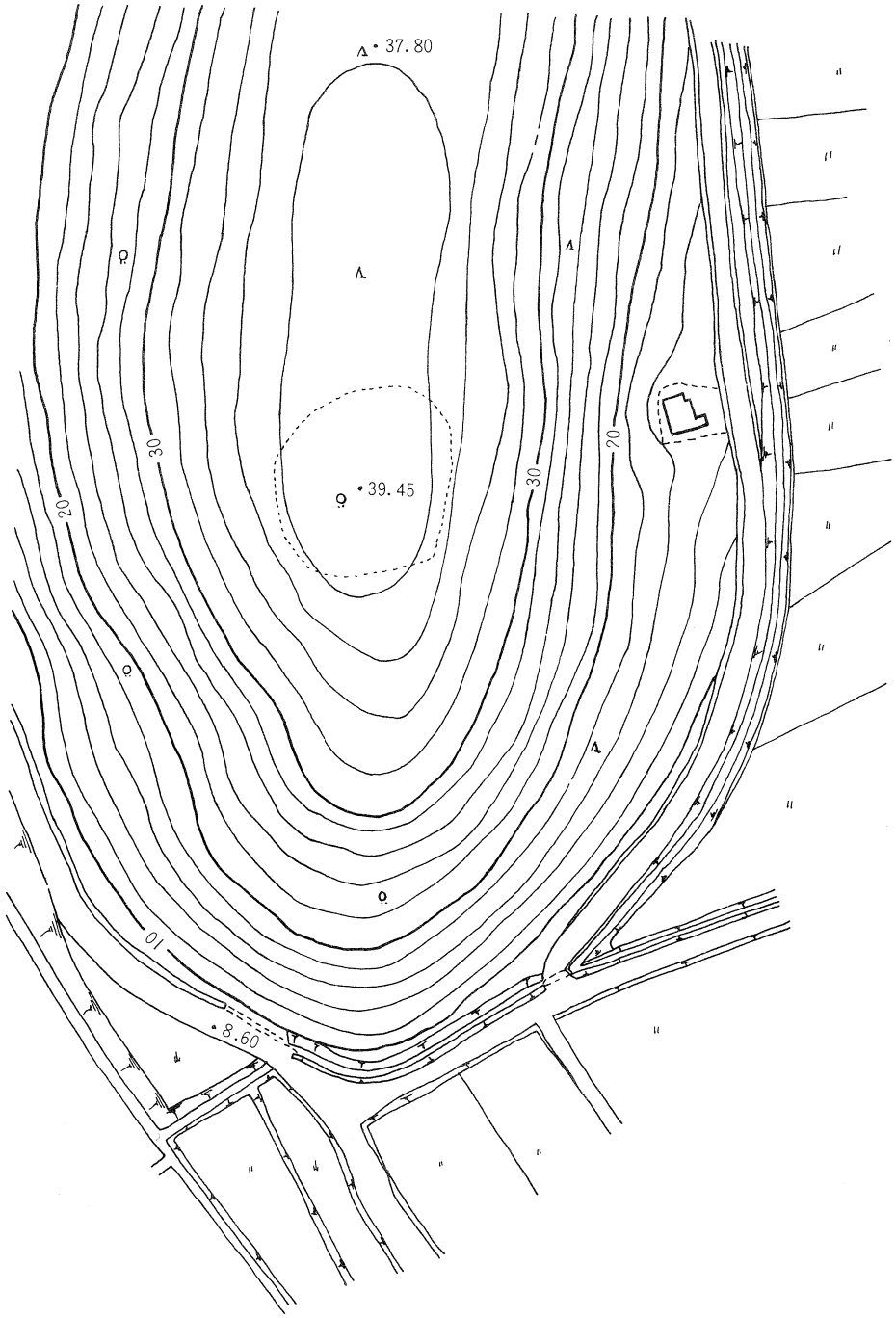
〈第３週〉　３月15日～20日

盗掘坑と思われる中央窪地を掘り下げ、坑壁面の精査でゆるやかなＵ字形を呈する朱の散布面を確認し、棺底と思われる朱の散布面を境に墓壙と棺内の土色の違いが判明した。ＳＷ区及びＳＥ区を掘り下げ、埋葬主体部の検出にとりかかった。

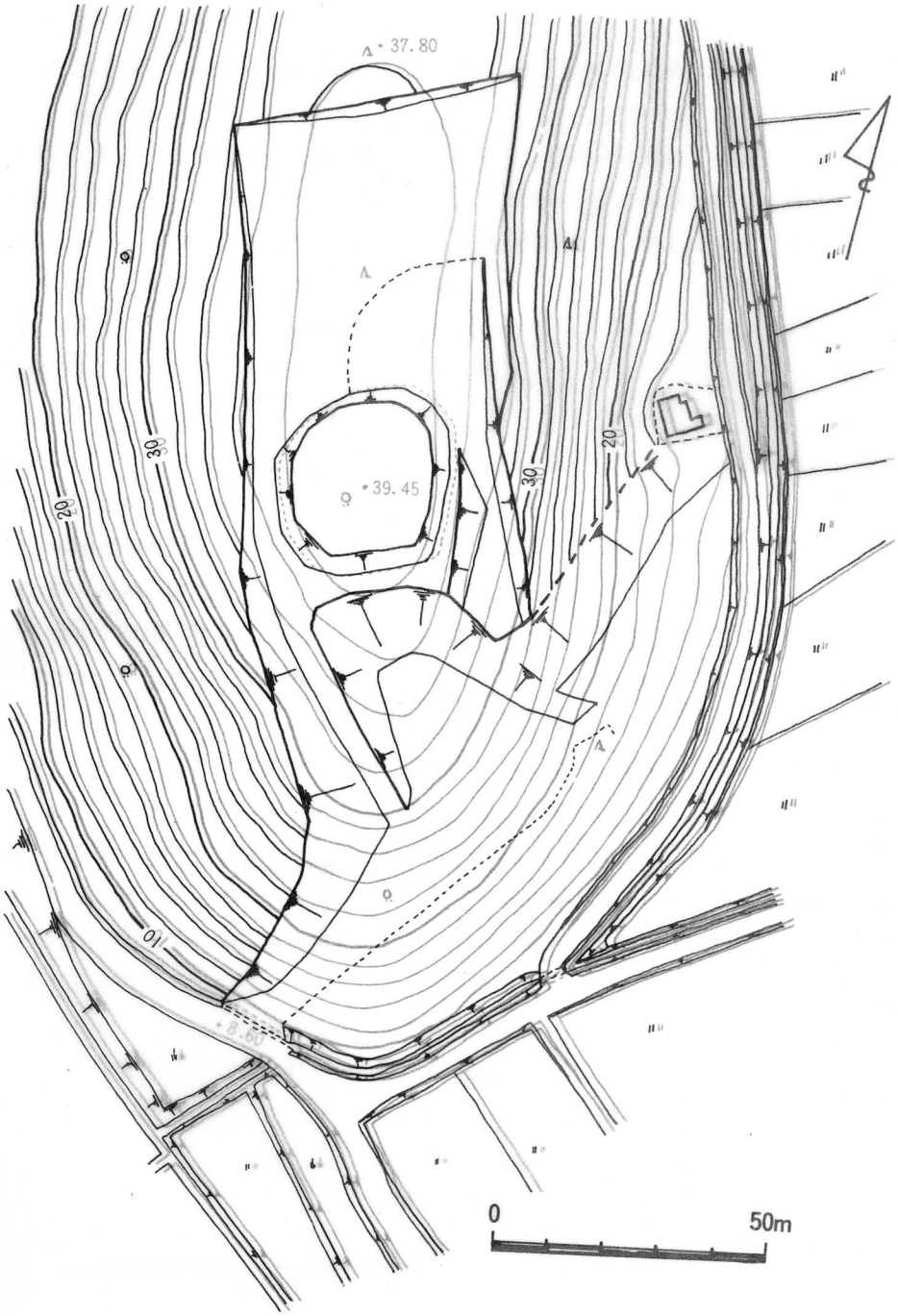
〈第４週〉　３月23日～28日，30日

埋葬主体部の東南ＳＥ区に弥生土器の集中した出土状態が認められ、住居跡の可能性が強くなる。又、ＳＷ区とＮＷ区の境に土壙らしき落ち込みとＳＷ区南に礫集石が認められた。さらに、ＳＷ区では完形に近い土器の散布も認められた。

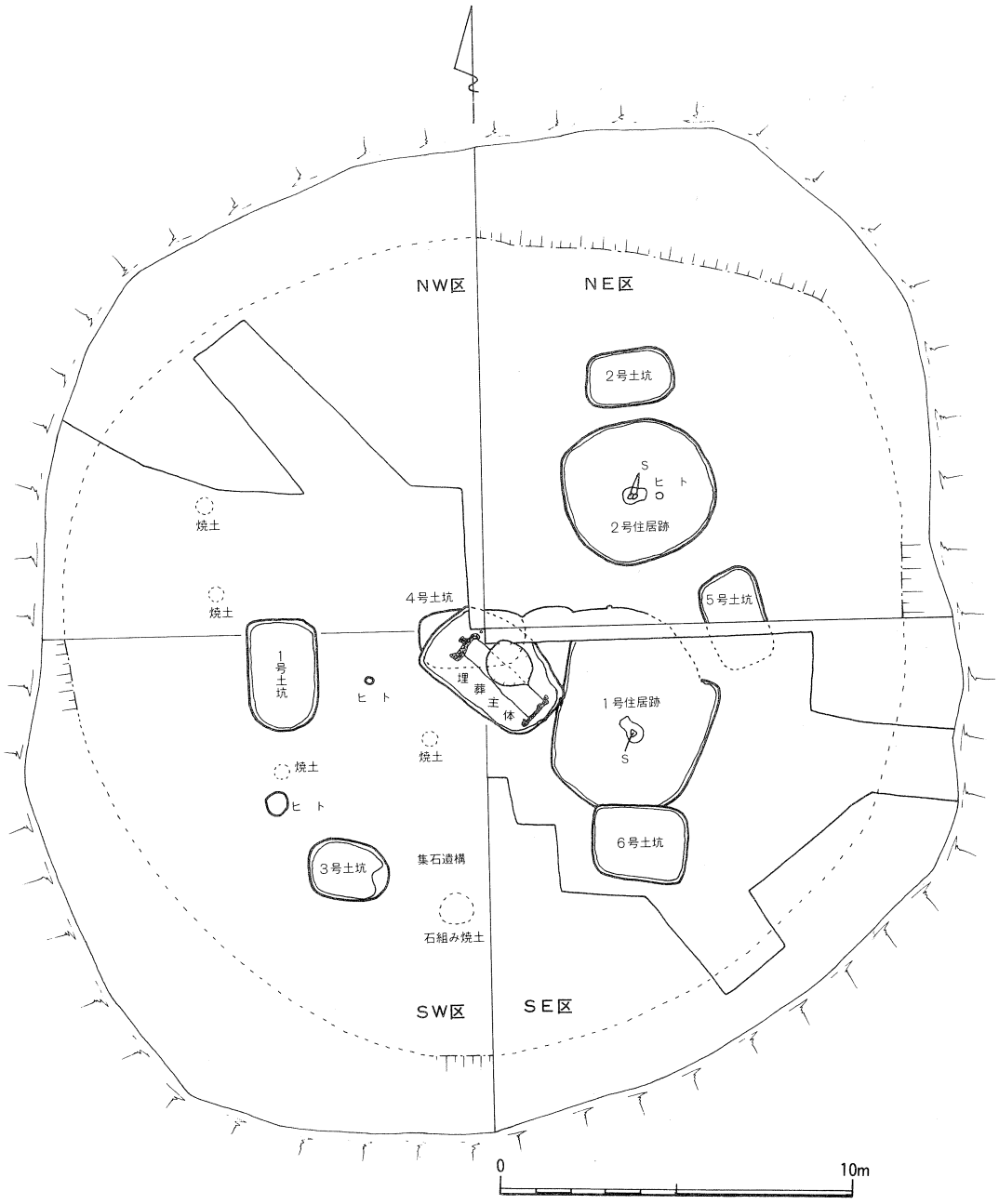

20
30
20
30
0
50m



第２図　遺跡周辺地形図（Ｓ＝1/1,000）



第２図　遺跡周辺地形図（S＝1/1,000）



第3図　遺構配置図　（S＝1/200）

〈第５週〉　４月７日～11日

実測作業を中心に調査を進めると共に、西側丘陵縁辺部に残る溝状遺構を発掘する。

〈第６週〉　４月13日～18日

ＳＷ区、ＮＥ区を完掘すべく掘り下げ。その結果、ＳＷ区において土壙１、ＮＥ区において竪穴住居跡１、土壙２の検出をみる。又、ＳＥ区、ＮＷ区に放射状に２箇所トレンチを設定し、ＳＥ区において住居跡と重複する土壙を検出する。さらに割竹型木棺の埋葬主体部西北部に土壙１が重複することを確認する。

〈第７週〉　４月20日～23日

遺構の最終的掘り下げと共に実測図作成を進める。

以上の結果、先土器時代から古墳時代に至る遺構と遺物が確認され、発掘調査面積の狭少さの割には多くの貴重な成果を上げることが出来た。

先土器時代の遺物としては、ナイフ形石器、尖頭器、掻器などがあり、縄文時代の遺物では、早・前期の押型文土器、塞ノ神式土器に打製石鏃が伴っている。

弥生時代の遺構と遺物は、持田中尾遺跡の主体を占めるもので、竪穴住居跡２、土壙６、集石遺構１、焼土面４、溝状遺構などの遺構に伴い、弥生時代前期末～中期の土器が多量に出土し、他に土製品としては紡錘車、石器類としては石錘、石包丁、石斧、石剣、石鏃などが出土している。各遺構の配置の状態は、古墳の埋葬主体部の西北に４号土壙が重複し、東端で１号住居跡と接している。さらに１号住居跡は６号土壙で南端部を切られている。ＮＥ区では、２号住居跡がやや中心よりに位置し、その北50cm程に２号土壙があり、南東 150cm程にＮＥ区とＳＥ区にまたがる形で５号土壙がある。そして、ＳＷ区では焼土面２に焼土を伴う集石遺構が検出され、ＮＷ区との境で１号土壙があり、その南 350cm程に３号土壙が位置している。

古墳時代については、埋葬主体部の検出は出来たが、副葬品などは既に盗掘により失われており、その遺存も認められなかった。

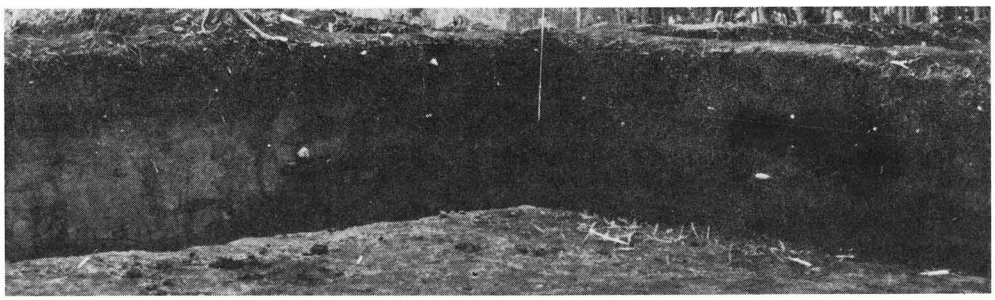
第 Ⅱ 章　　墳丘と包含層の状態

遺跡は標高38m 程度から全く断崖状に掘削されていたため、円墳と思われる遺跡の築成の状態など旧状の把握、及び丘陵地西側掘削面に確認された溝状遺構の全体像など、遺跡の総合的な理解には種々の制約を課すものであった。

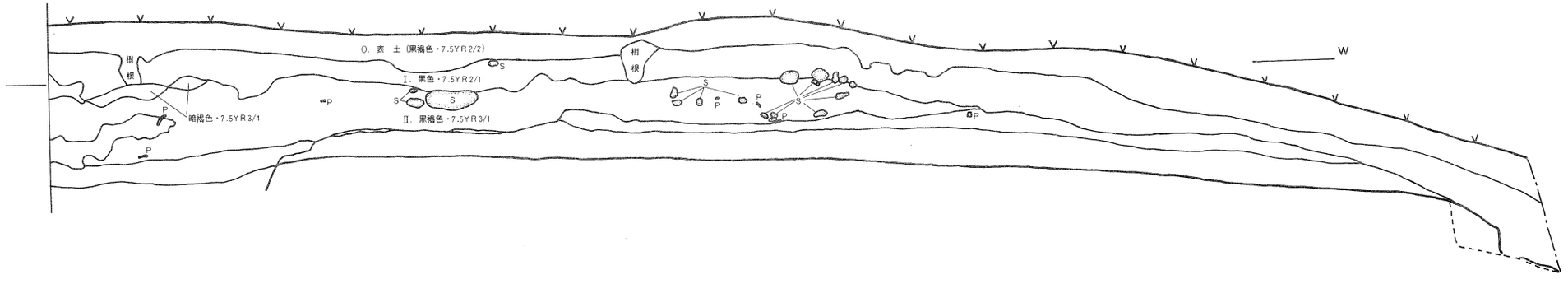
〈墳丘〉として土層断面をとらえた時、墳丘を構成する基本的な大きな土層として次の４層が認められる。表土は、黒褐色の腐蝕土層で墳丘全体をおおよそ20cm前後の厚さで被っている。墳丘は竹木の雑木林となっていたため、それらの根がはびこり、土は乾燥すると容易に砂粒状になる。Ⅰ層としたものは、黒色土層で東西土層断面の西半を除いて断片的な層を成しており、古墳築造時の盛土最上層を示すものである。Ⅱ層とした黒褐色土層は、東西土層断面西半及び南北土層断面南半においては比較的明瞭に厚く認められるが、東西土層断面東半においてはほとんど認めることが出来ない。Ⅲ層としたのは砂礫を混入する黄褐色粘質土で、全体的にさほど明瞭な層を成しているわけではない。Ⅳ層とした黒色土層は、弥生時代の文化層を包むものであり、古墳はⅣ層と次のⅤ層暗褐色土層を掘削整形して築造されている。Ⅳ層に対しⅣ′層としたものは、硬質の黒色土層で、Ⅳ層に比して乾燥により亀裂が生じ易い。

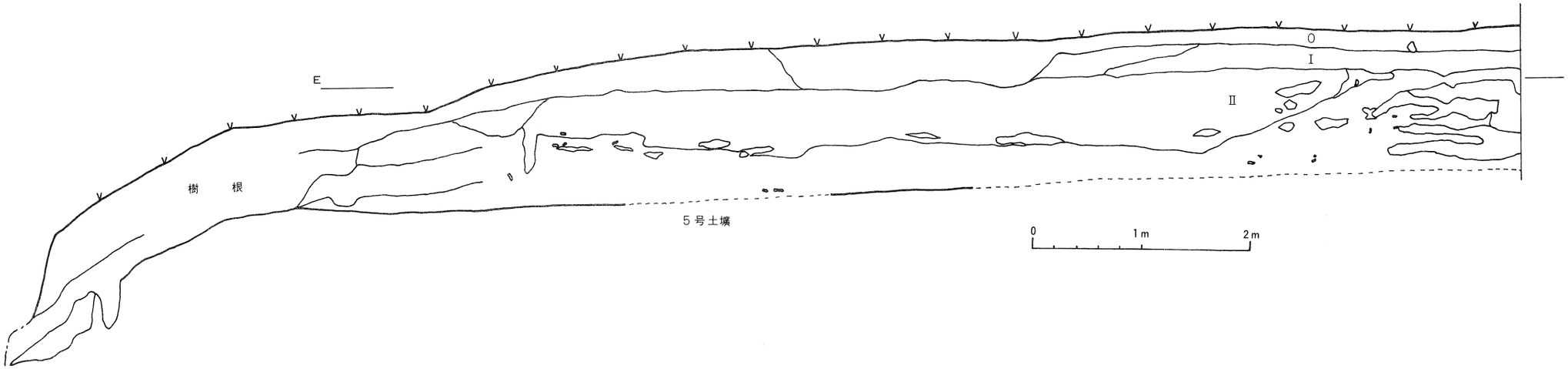
埋葬主体部の墓壙は、Ⅳ層黒色土層の下面から掘り込まれ、暗褐色土層を墓壙及び棺底と共に底面としている。

〈包含層〉として土層断面をとらえた時、古墳築成時における古墳時代人による覚乱層とプライマリーな弥生時代の文化層とに分けて考える必要がある。表土層からは、土師器細片をみているが、この資料についての明確なものは調査結果からは得られなかった。Ⅰ層黒色土層中からはほとんど遺物の出土は認められず、Ⅱ層黒褐色土層から墳丘中の出土遺物は集中している。このⅡ層が古墳築造の際古墳時代人により周辺地の掘削土として盛土されたもので、石錘の多さがＮＥ区ではとくに顕著でかかる盛土が石錘を主たるものと



PI.3　ＮＥ区土層断面





第4図　墳丘東西土層断面実測図　　（S＝1/50）

して包含した周辺地から運ばれたことをうかがわせる。又、遺跡全体から出土した土器類の約半分が、当然のことながらプライマリーな状態に比して細片化が進んではいるものの、Ⅱ層出土で占められている。そして、Ⅰ層とⅡ層の境に幼児頭大から拳大に至る河原石が集中する現象は注目された。Ⅲ層砂礫混り黄褐色粘質土層は遺物を包含せず、この層が地山掘削土から成るものであることをうかがわせる。Ⅳ層がⅡ層に対して比較的プライマリーな状態を保った弥生時代の文化層であるが、この下面を弥生中期のものとすることが出来る。竪穴住居跡、土壙などの遺構はこの層の下面から掘り込まれている。しかし、この黒色土層からの掘り込み面を土色上だけから判断することは難しく、中期土器が比較的面的広がりをもち散布が把握された面を中期の生活面と確認出来るだけであった。Ⅴ層暗褐色土層はⅣ層に次いで弥生前期末～中期初頭の文化層として認められる。Ⅴ層上面において、焼土を伴う集石遺構、焼土面、土器の集中した出土が検出され、これを前期末～中期の生活面とすることが出来るが、住居遺構等の掘り込みはこの面からは認められなかった。しかし、焼土面に近接し土器類が集中する状態は、明らかに生活の痕跡をうかがわせるものである。

他に縄文早・前期土器、先土器時代の遺物が確認されているが、今回の調査対象地においてはそのプライマリーな層及び層位を確認することは出来なかった。

墳丘形成の土量単位については、埋葬主体部を中心とする墳丘中央部で比較的小さな単位の土層を認めることは可能であったが、土層断面全体においてそれを充分に把握することは出来ない。墳丘中央部で認められる小単位の土層は、褐色土と暗褐色土の二種類の土色でとらえることが出来、おおよそ10cmを前後する厚さで複雑な層を成している。

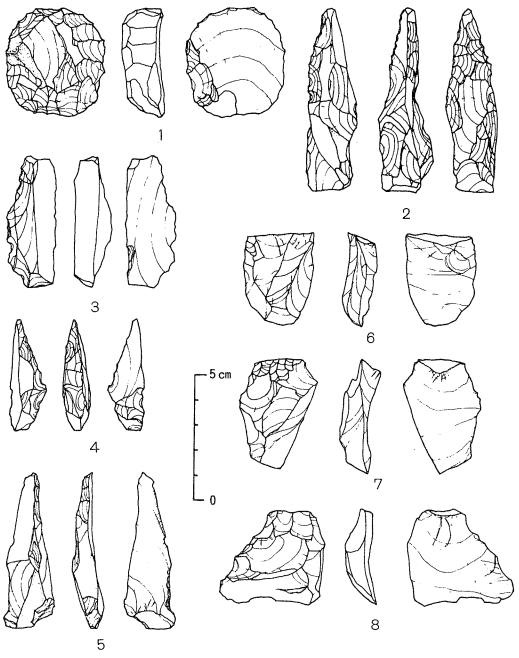
第 Ⅲ 章　先土器時代

出土した先土器時代の遺物としては、プライマリーな状態の出土ではなかったが、掻器、尖頭器、ナイフ形石器などがある。

掻器は、円形状を呈するラウンド・スクレイパーと呼ぶべきもので、黒曜石を素材としている（1）。短径 3.8cm、長径 4.2cmを測り、剥離面の片側からのみ周囲を縦長に打ち欠き、円形状の形を整えている。

尖頭器は、三稜尖頭器と呼ぶべきもので、ホルンフェルスを素材としている（2）。長さ 7.2cmを測る。

ナイフ形石器は、ホルンフェルスの横長剥片を素材としたもので、いわゆる瀬戸内技法との関係をうかがわせるものもみられる。

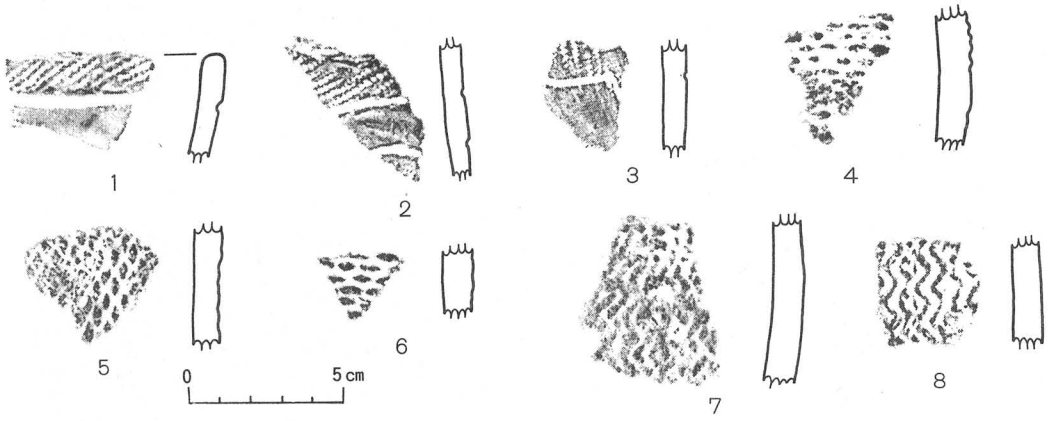


第5図　石器実測図（S＝1/3）

第 Ⅳ 章　縄 文 時 代

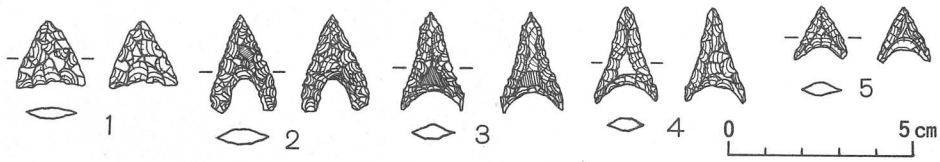
縄文時代の遺物は、土器では押型文土器片・縄紋系土器片があり、石器では打製石鏃がある。

1・2・3は縄紋系の土器片で、同一個体とみても良く、色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。4・5・6は楕円押型文土器片で、全体的な傾向として胎土に石英砂を混じえ、色調は褐色を呈し、焼成は良好である。一方、7・8の山形押型文土器片は、楕円押型文に比べ色調は薄く黄褐色系の色調を呈している。



第6図　縄文土器実測図・拓影（S＝2/5）

打製石鏃は、正三角形状（1）、長脚をもつもの（2）、二等辺三角形状で基部のノッチの深いもの（3・4）、正三角形状で基部のノッチの深いもの（5）等がある。2・3が黒曜石を素材とし、他は砂岩を素材としている。



第7図　打製石鏃実測図（S＝1/2）

第 Ⅴ 章　弥 生 時 代

弥生時代のものとして検出された遺構は、竪穴住居跡２、土壙６、集石遺構１、焼土面４などである。

１号住居跡は、古墳の埋葬主体部の東南部に接して検出され、住居跡上面は土器溜めの様相を呈しており、その中からは数多くの炭化種子が検出されている。住居跡は、６号土壙に南コーナーを切られており全形は定かではないが、不整形な方形プランを呈するものと思われる。中央部には人頭大の河原石をもつ炉跡が検出されている。

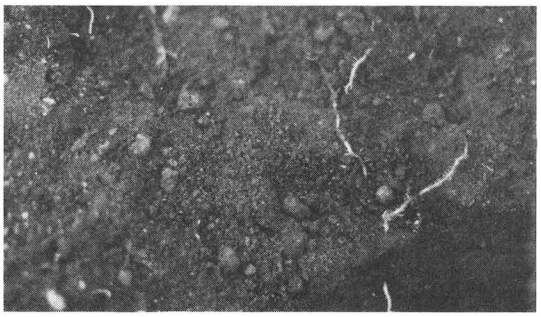
２号住居跡はＮＥ区に検出され、ほぼ円形のプランを呈するものである。最大径 4.7m 、南北の最小径４ｍで、深さはⅤ層暗褐色土層から東端で約15㎝、西端で約20㎝を測る。中央部には、１号住居跡と同様河原石の入った掘り込みがあり炉跡と思われるが、南北辺に各々１箇所比較的厚い焼土面が検出され、住居跡と時期差を持つものと思われるが、焼土面に伴う遺構は検出されていない。

１号住居跡から検出された甕形土器は口縁部が「く」の字に外反するが、２号住居跡から検出された甕形土器は口縁端部と胴部に刻目突帯をもつもので、時期的には１号住居跡が後出するものと思われる。

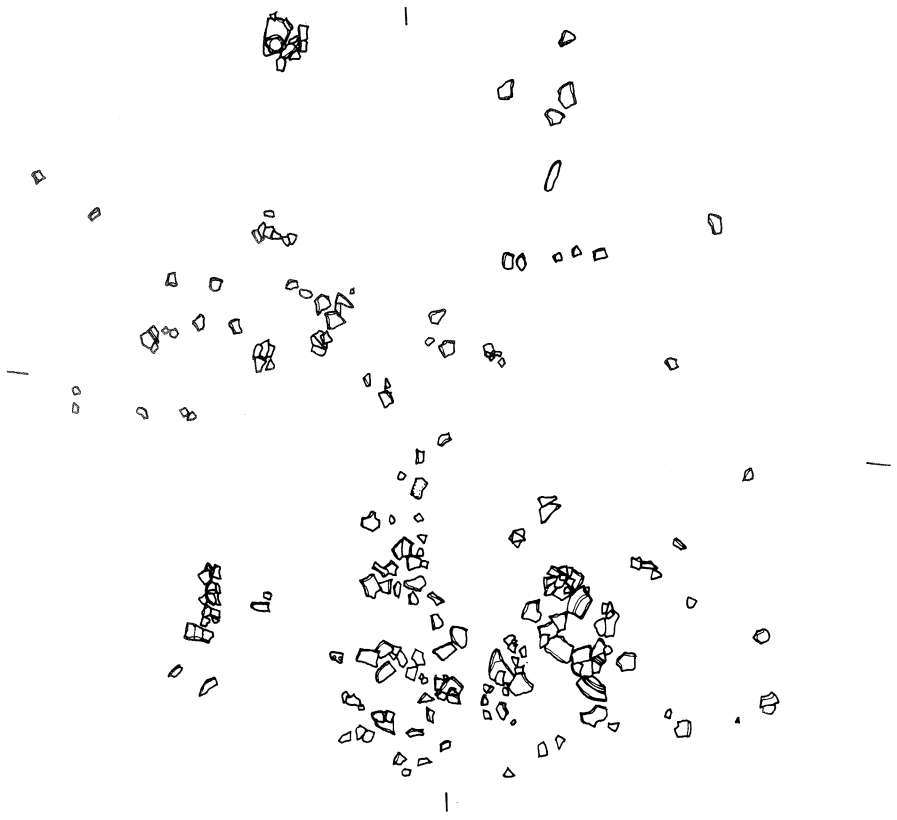
溝状遺構は、ほぼ74mの間隔で、円墳

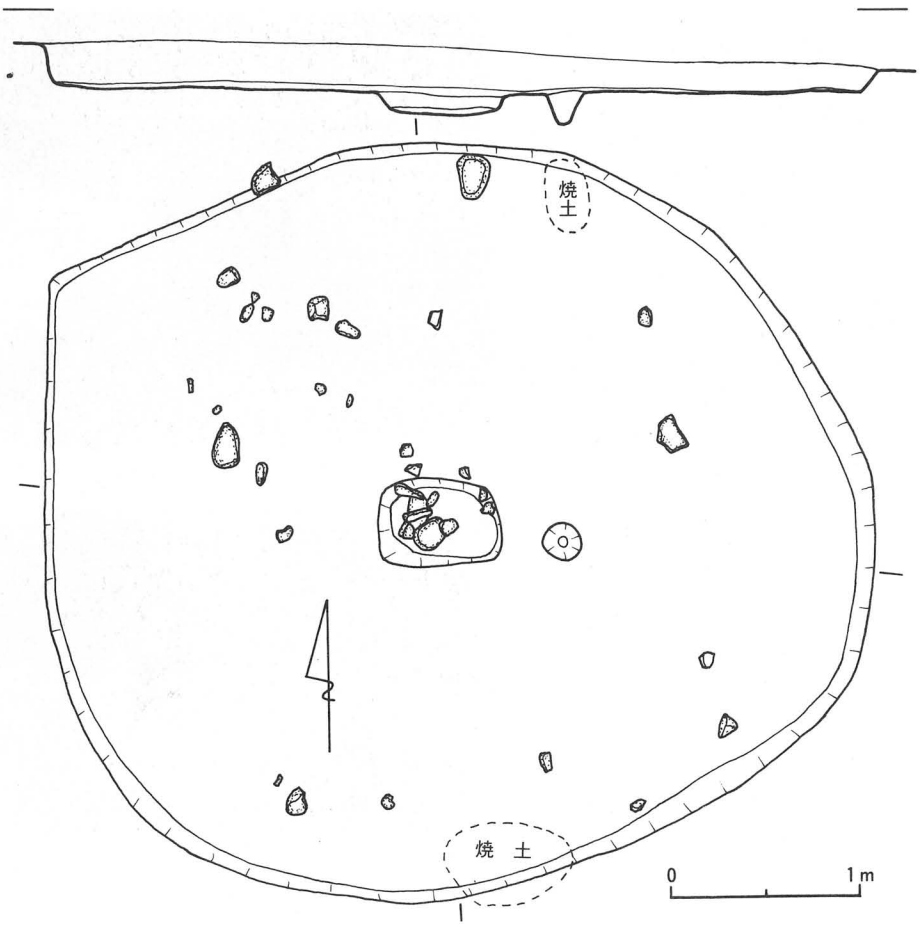
PI.4　１号住居跡と６号土壙
（手前が主体部）

PI.5　１号住居跡上面の状態
（奥が主体部）

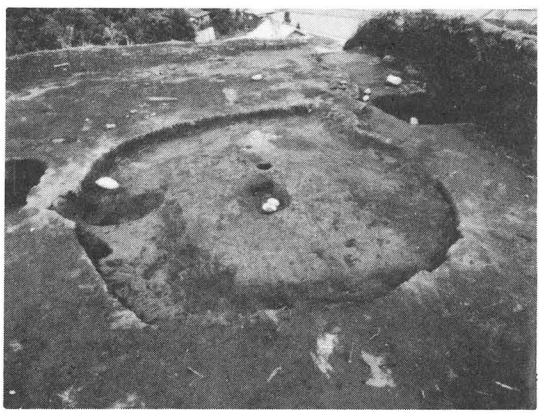


PI.6　１号住居跡上面の炭化種子

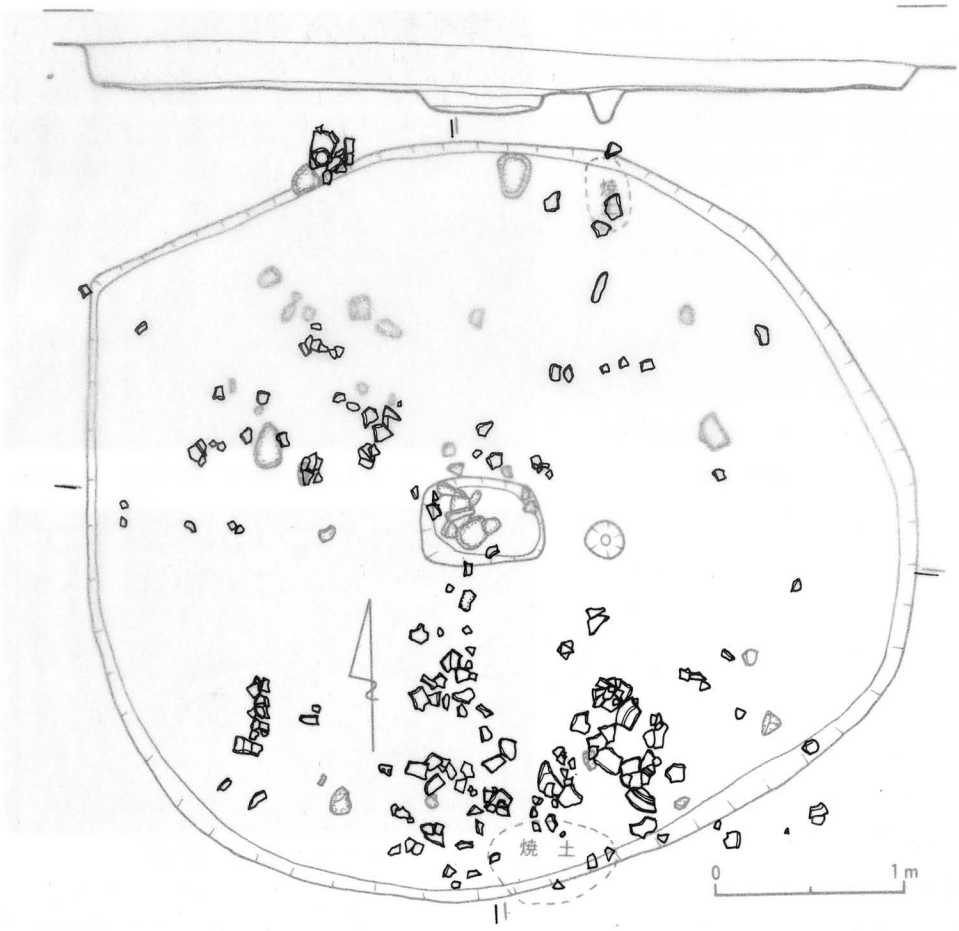




第8図　2号住居跡実測図
(S＝1/40)



PI.7　2号住居跡



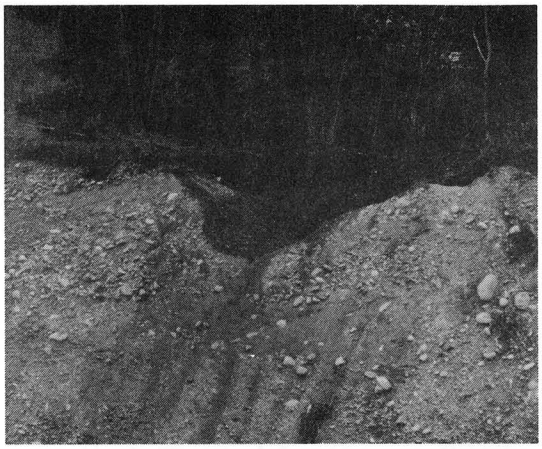
第8図　2号住居跡実測図
(S＝1/40)

Pl.7　2号住居跡

を中央に挟み西側掘削面に2箇所検出されたが、底面が鋭くV字形を成す溝であった。北V字溝の北隣にV字溝とは異なりゆるやかなカーブをもつ落ち込みが1箇所確認されたが、発掘の結果は溝状遺構とも住居跡残存部分とも判断出来なかった。残されたV字溝は残存部分で確察する限り、表土黒色土直下の礫混入黄褐色土及び砂礫層を掘り込んでいる。これらの溝状遺構は、おそらく舌状の丘陵地を東西に走り、円墳下に検出された住居跡を含む集落を区画していたものと考えられる。

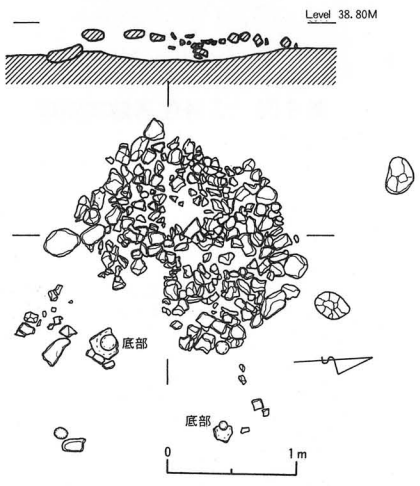
焼土面は、合計4箇所確認され、いずれも周辺に多量の土器を伴うものであった。さらにSW区では焼けた角礫をもつ集石遺構が検出されており、周辺には弥生土器底部等土器片の散乱が認められた。集石下には明瞭な掘り込みはなく、南東部には集石がみられず、円形のプランを考えれば南東部の約四分の一を欠くものであり、長方形のプランを考えれば北東～南西に長軸をもつ集石遺構とも表現出来る。

土壙は、6箇所に検出されているが、SW区に1号・3号土壙、NE区に2号・5号土壙、SE区に6号土壙、NW区の古墳埋葬主体部に重複して4号土壙が配置している。その内、ほぼ南北に長軸をもつものは1号、5号土壙で、2号・3号・4号・6号土壙はほぼ東西に長軸をもっている。1号土壙



PI.8　南V字溝

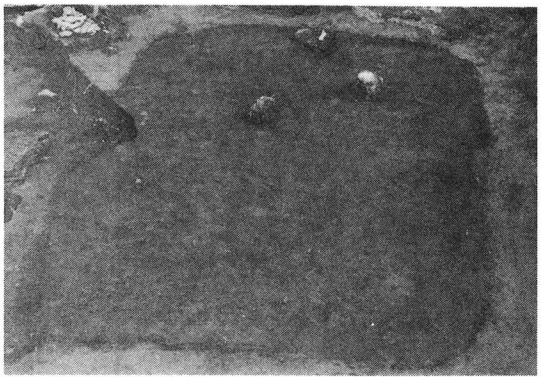
PI.9　集石遺構



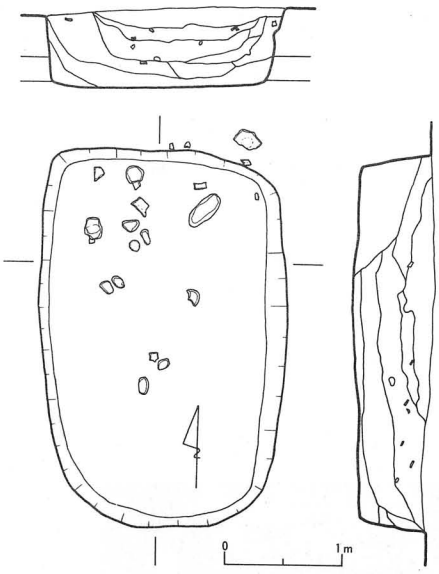
第9図　集石遺構実測図（S＝1/60）

は、長軸 3.2m 、短軸 2.1m 、深さはⅤ層暗褐色土層から 0.7m を測る。

遺物の出土状態は、墳丘中のものと弥生時代の文化層に伴うものとで判別せねばならないが、Ⅳ層黒色土層を弥生時代のプライマリーな層とみる時、最低上下２層が確認され、上層は肥厚化した逆「L」字の口縁と胴部に断面三角形状突帯をもつ、中期タイプの土器を最も特徴的なものとし、下層は口縁端部に突帯をもつ甕形土器及びそれが刻目となりさらに胴部に刻目突帯をもつ甕形土器が最も特徴的なものとされる。下層は前期末の様相をもつものから中期初頭のもので、これらは焼土面を伴うが明瞭な遺構を残さないもので、２号住居跡はこれらからやや後出して営まれたものと思われる。



PI.10　６号土壙(検出時)



第10図　１号土壙実測図（S＝1/60）

弥生時代の遺物の出土はおびただしく、土器類では甕形・壺形・鉢形の各種土器があり、石器類では磨製石鏃、石剣、石斧、石包丁、石錘、磨石、叩き石、砥石など豊富な種類が出土している。

甕形土器の第１のタイプでは、「下城式」系のもので、口縁部下に刻目突帯をもち、胴部にも同様の刻目突帯をもつものもみられる。１・２・３・４は胴部から口縁部にかけてがほぼ直線状に立ち上がるもので、１・３には口唇部の刻みがみられる。５・６は口縁部から胴部にかけてややふくらみをもち、このタイプには胴部の刻目突帯がみられる。いずれも胴部調整は刷毛目調整で、胎土には比較は多量の石砂粒を混入し、色調も一様に暗く黒褐色系の色調を呈している。６にみられるように底部はかなりしっかりした平底が付くものと思われる。

第２のタイプは、口縁端部と胴部に刻目突帯あるいは突帯のみを付すもので、これらは一様に胴部にふくらみをもつものである。器面調整には、明瞭な刷毛目が認められるもの（７・９・11・15・20）、刷毛目が粗く不明瞭なもの（８・９・12・18・19）、粗いへう磨きにかわるもの（14）等がある。11・18は突帯の付し方が特徴的で、突帯端部が結ばらず、はね上げ、あるいは垂下させている。又、20の甕形土器は口縁端部の刻目突帯と胴部の刻目突帯間を各単位２条の沈線を配し連絡している。これらは、第１のタイプと同様に胎土に比較的多くの石砂粒を混入しているが、色調は全体に明るく黄褐色系の色調を呈している。

壺形土器は、外に大きく開く口縁部の内面に刻目突帯を付すタイプと鍬先状口縁の二種類が代表的なもの

PI.11　SW区の遺物出土状態

第11図　SW区遺物出土状態　（S＝1/80）

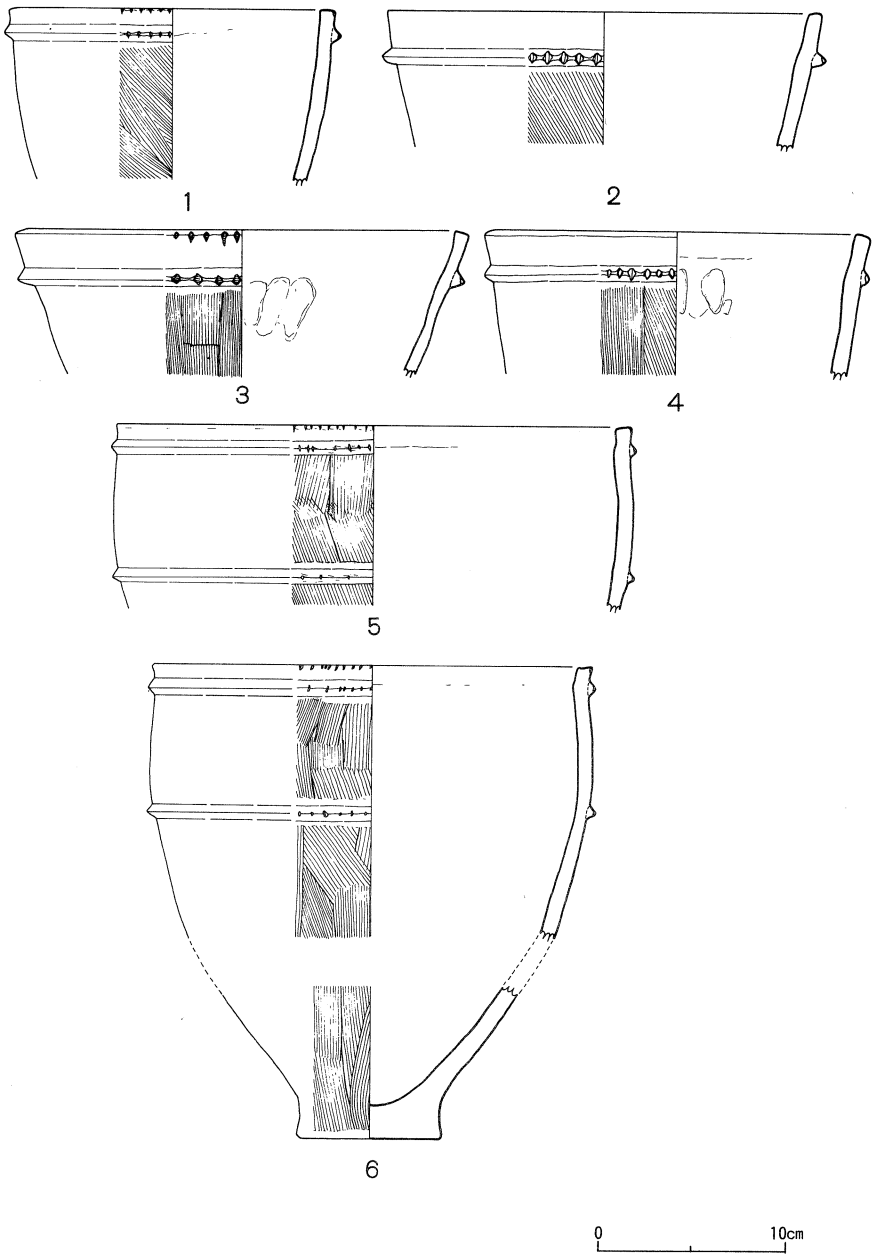
である。鍬先状口縁の壺形土器は頭部に突帯を付すものがみられ、21は胴部に２条を単位とする突帯を付している。口唇部の刻目の装飾は両タイプにもみられる。器面調整は、甕形土器にみられた刷毛目調整にかわり、へラ磨きが主となり、調整の方法も比較的丁寧に行われている。以上の他に壺形土器では沈線文を主とした施文をもつものがあり、沈線文間を竹管刺突文あるいはへラ先による列点文で装飾している。

石器類の豊富さは、本遺跡で特筆されるべきもの

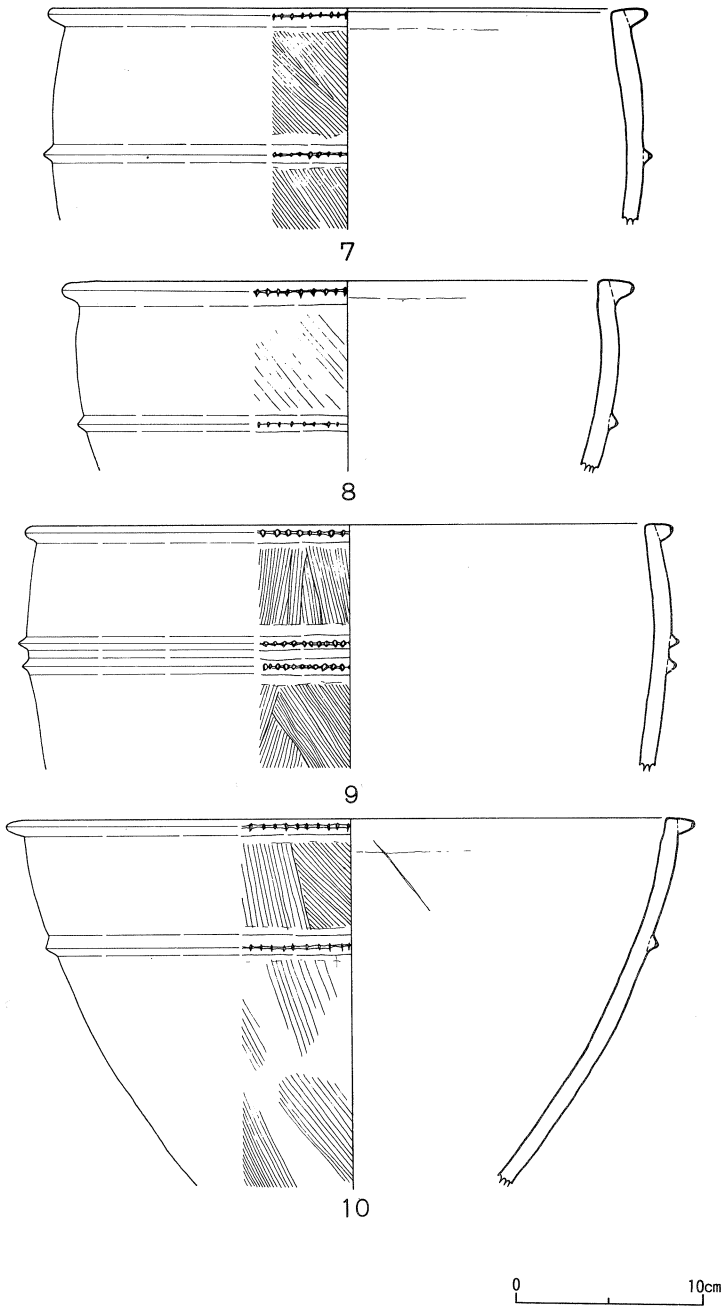
で、磨石約30点、石錘（軽石製石錘を含む）約50点等が多量に出土している。

石斧には打製石斧と磨製石斧があり、打製石斧は土耕具としての様相をもつものが多い。磨製石斧は、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、抉入り片刃石斧の各種がある。石包丁は比較的大型の三日月状のものが主であるが、他に大型の石包丁及び大型のつまみ付き石包丁なども出土している。磨製石鏃は、長手のものと正三角形に近いものとがある。石器類の内で注目されるのは、石剣の出土で、１本は小型のもので長方形の茎部をもち、１本は大型のもので両側に抉入をもつものである。

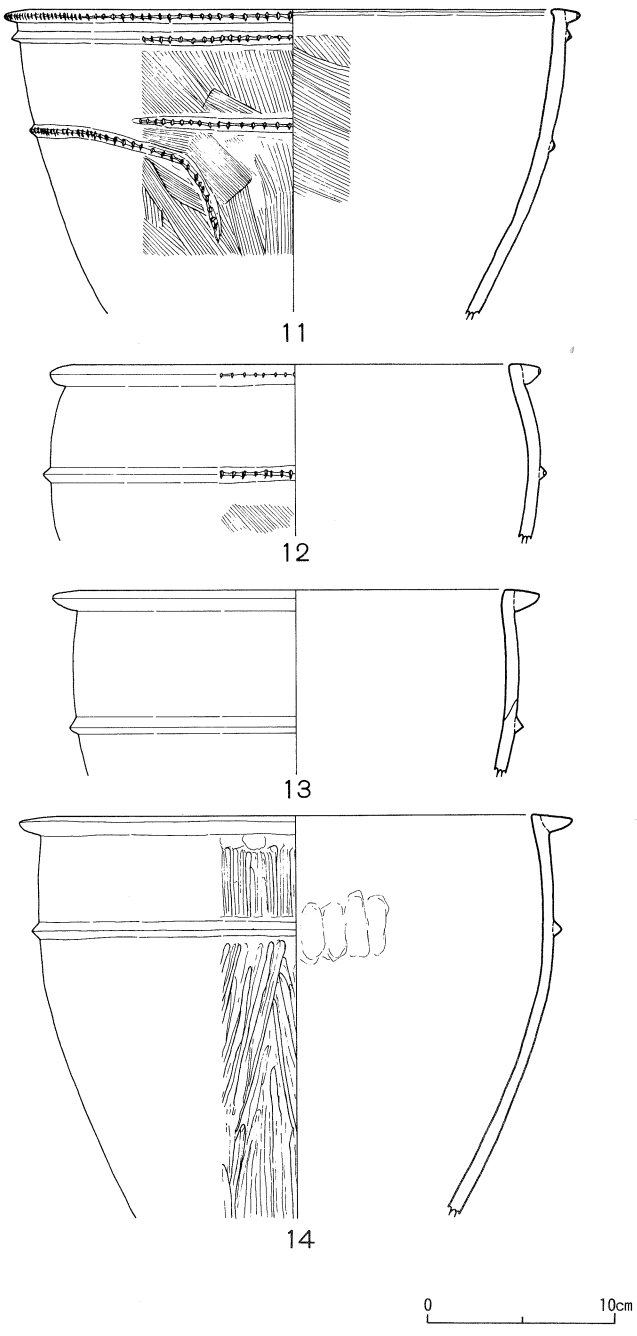
他に、有溝砥石、小型砥石、磨石、石錘などの出土がある。



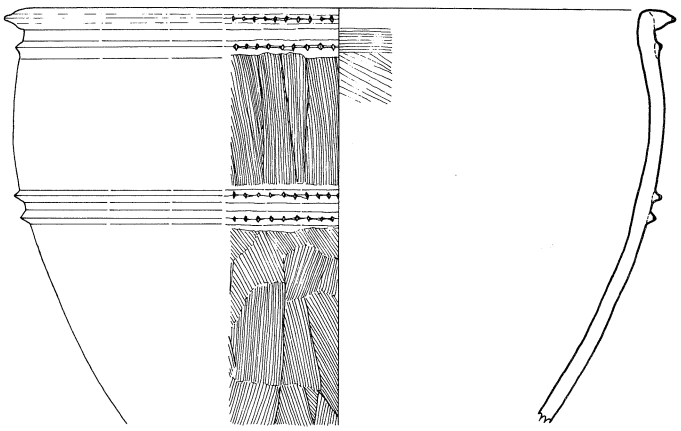
第12図　弥生土器実測図（1）　（S＝1/4）



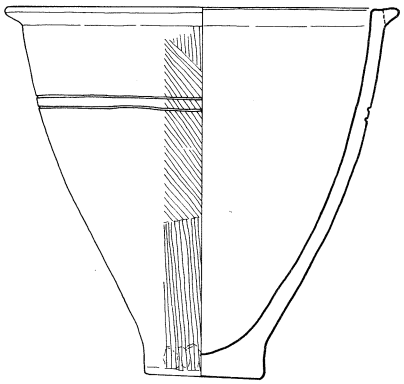
第13図　弥生土器実測図（2）　（S＝1/4）



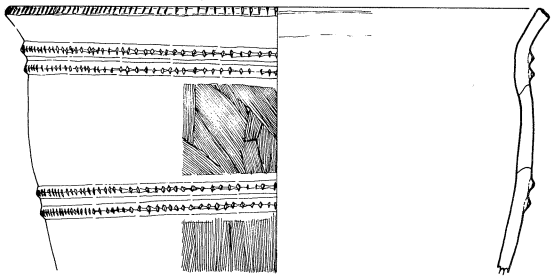
第14図　弥生土器実測図（3）　（S＝1/4）



15



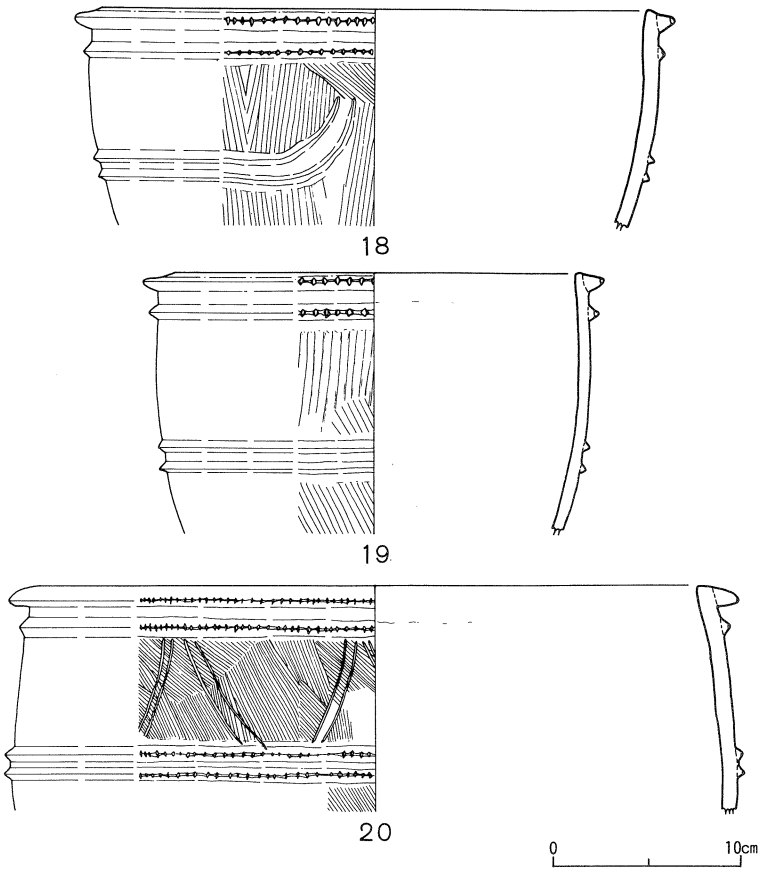
16



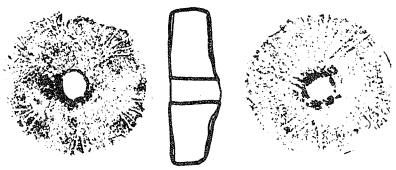
17

0 10cm

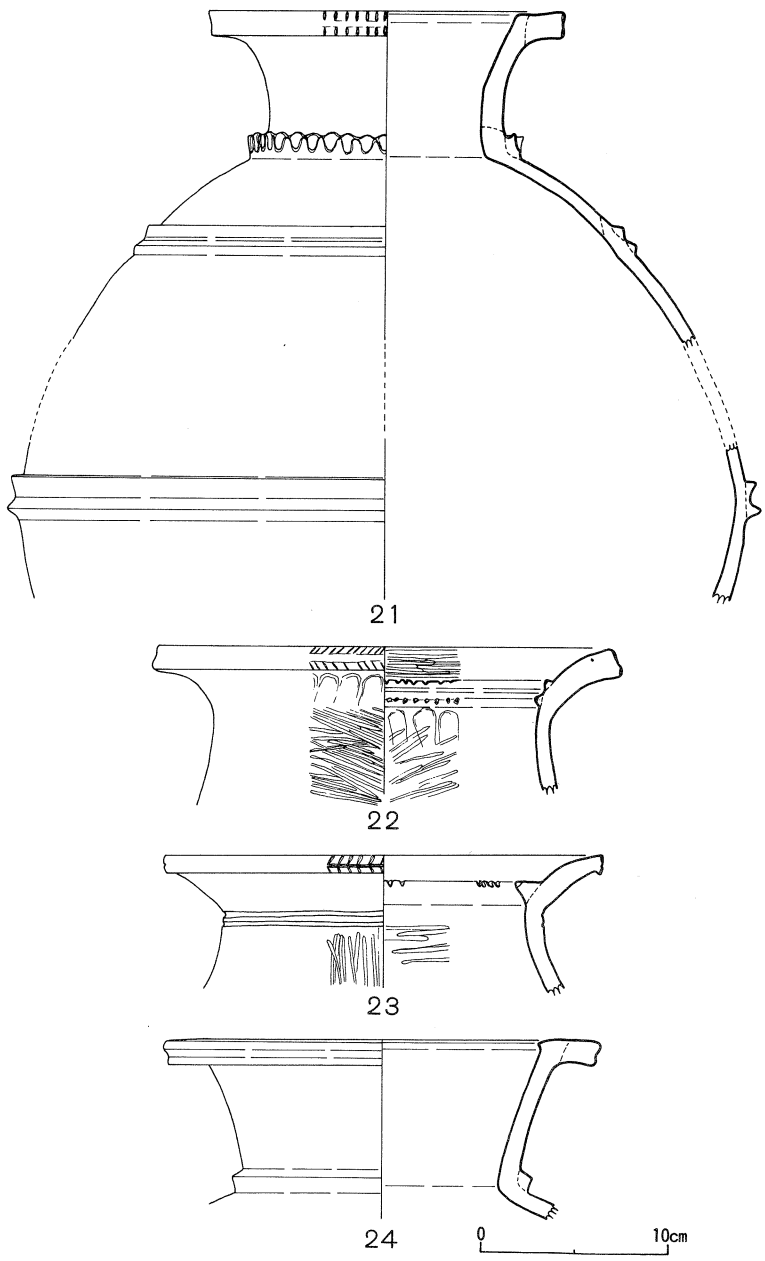
第15図　弥生土器実測図（4）　（S＝1/4）



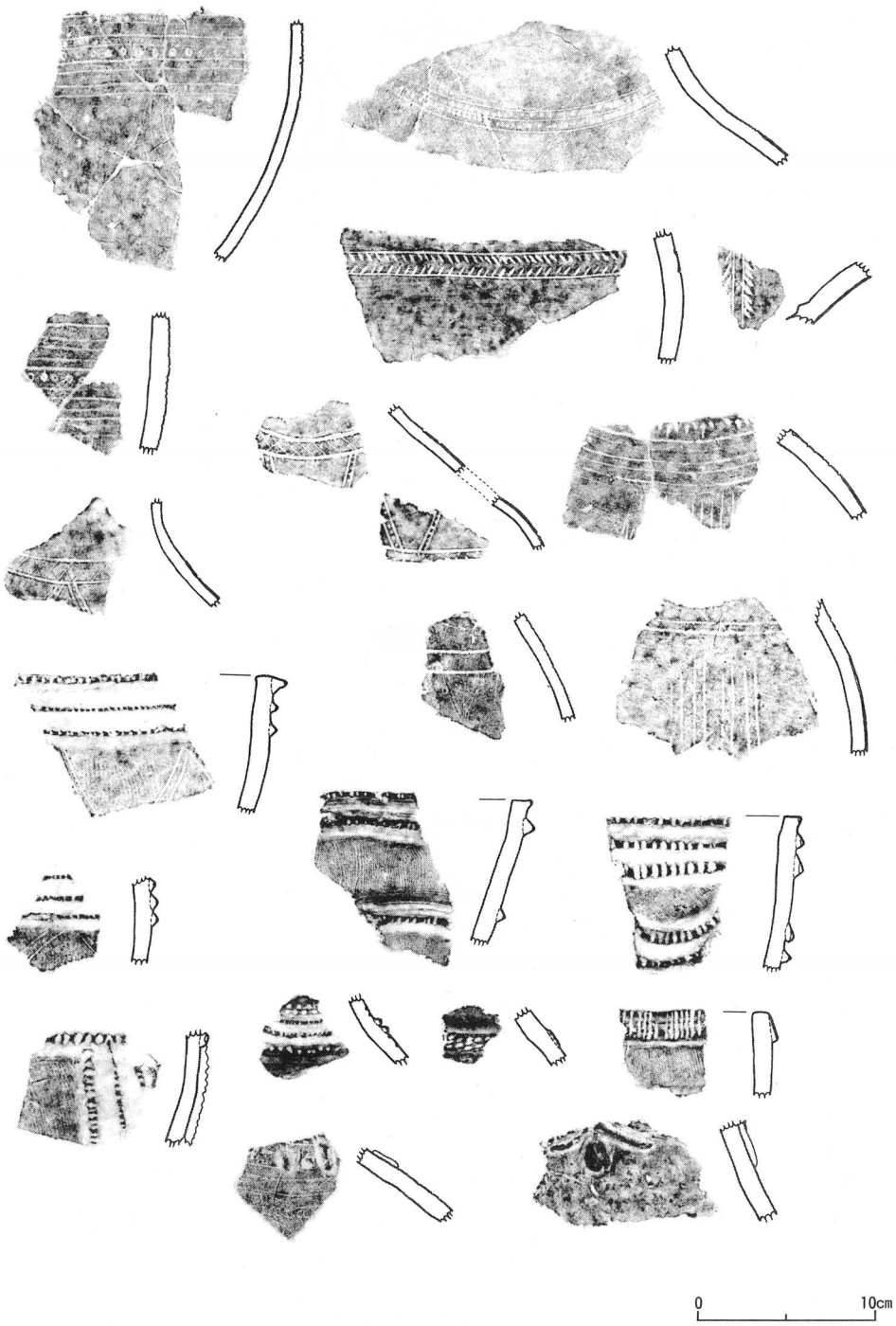
第16図　弥生土器実測図（5）　（S＝1/4）



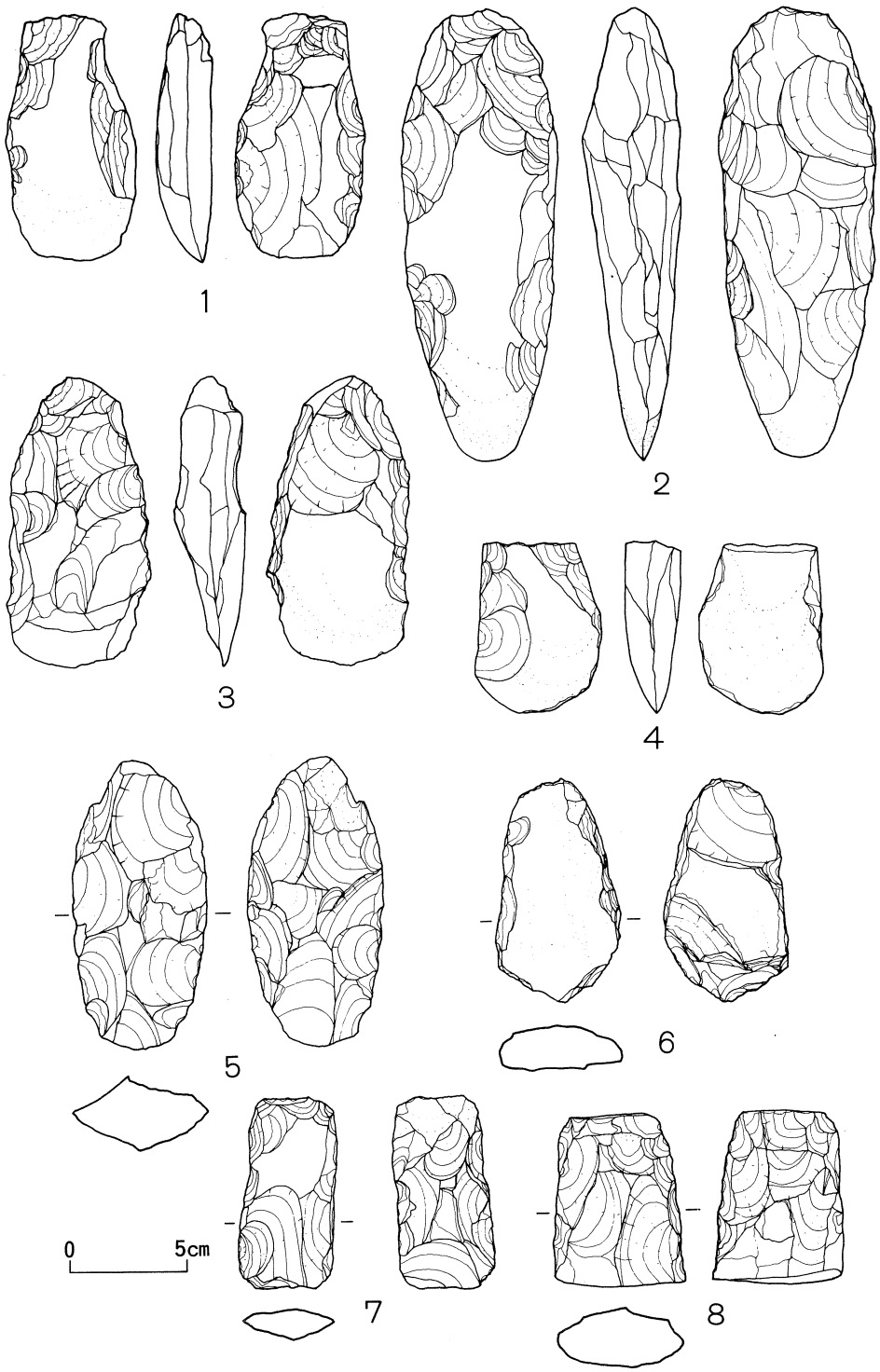
第17図　紡錘車実測図・拓影　（S＝1/2）



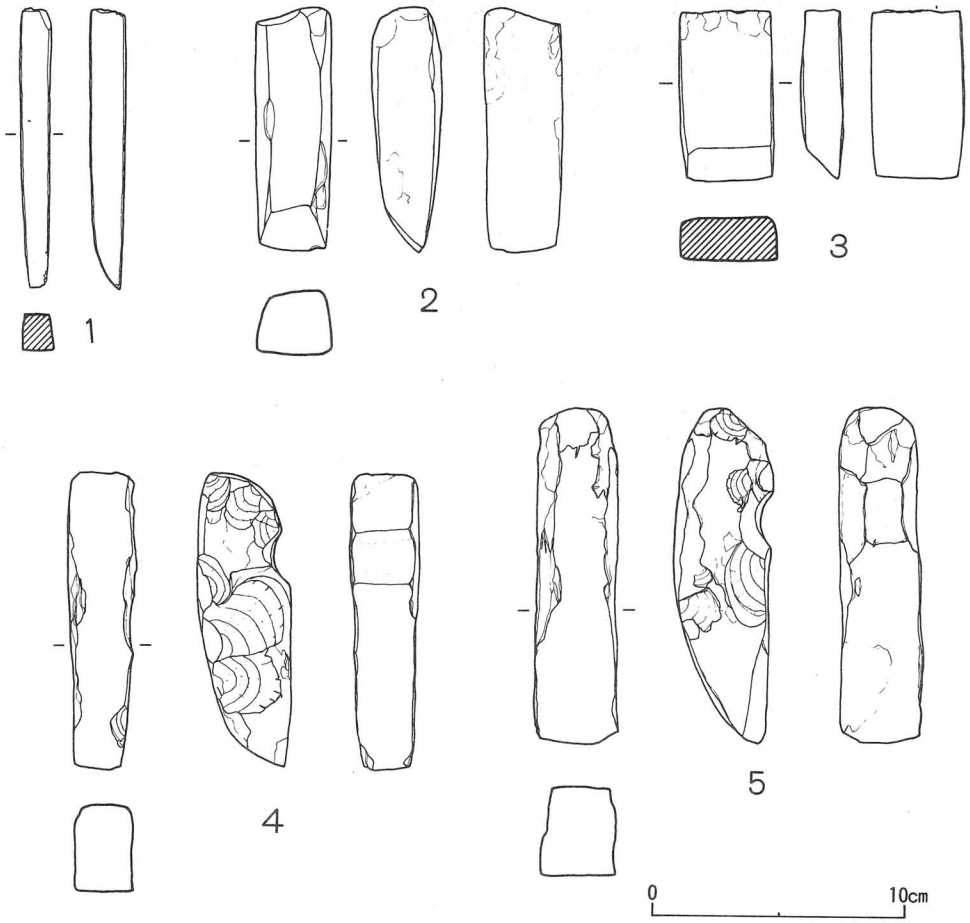
第18図　弥生土器実測図（6）　（S＝1/4）



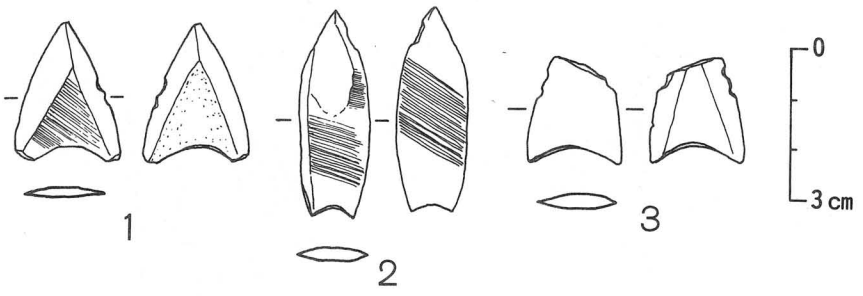
第19図　弥生土器実測図（7）　（S＝1/4）



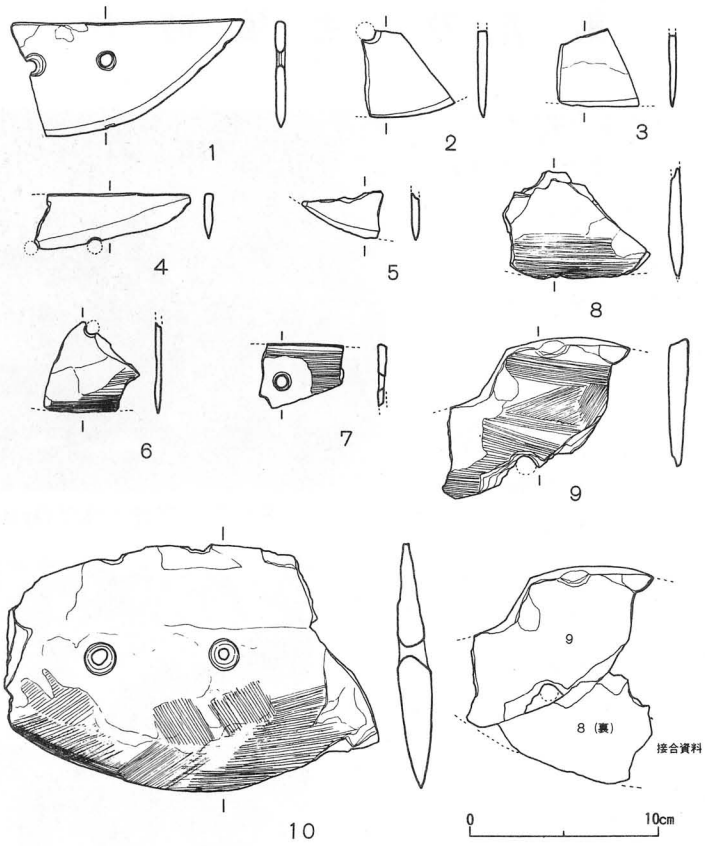
第20図　石斧実測図（1）　（S＝1/3）



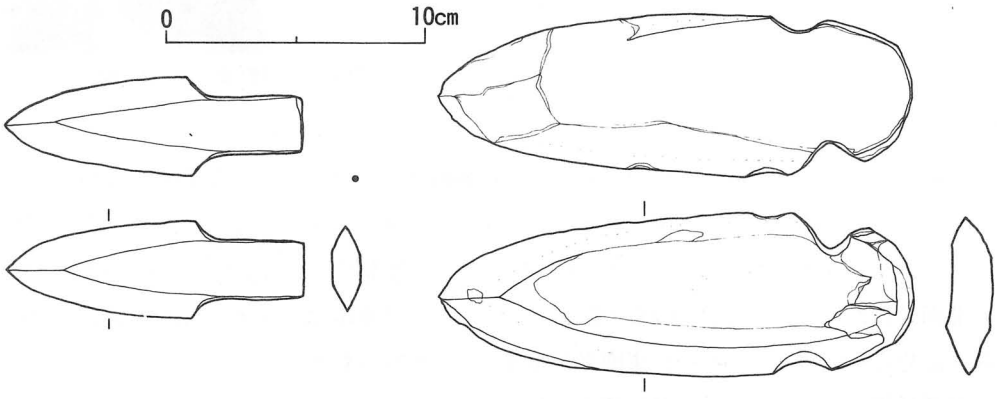
第21図　石斧実測図（２）　（S＝1/3）



第22図　磨製石鏃実測図　（S＝2/3）



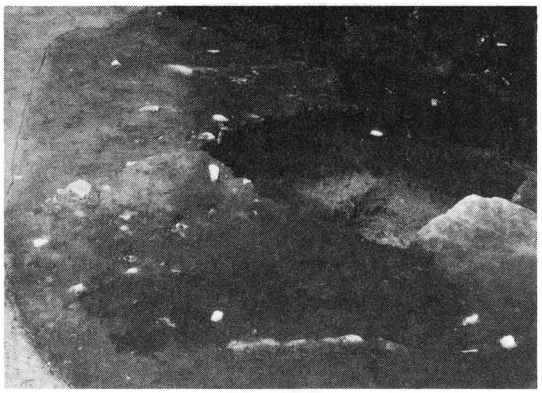
第23図　石包丁実測図　（S＝1/4）



第24図　石剣実測図　（S＝1/3）

第 Ⅵ 章　古 墳 時 代

高塚古墳は、発掘前の墳丘観察からも推量された通り、径24m の円墳であることが確認された。遺跡は円墳のぎりぎりまでが掘削されていたため周囲の状況は判断出来ないが、墳端部はⅤ層暗褐色土層が掘削整形され、確認出来る範囲では周溝があったとは断定し得ない。墳丘の高さは、比較的平担で墳端部からのレベルで約 1.8m を測る。



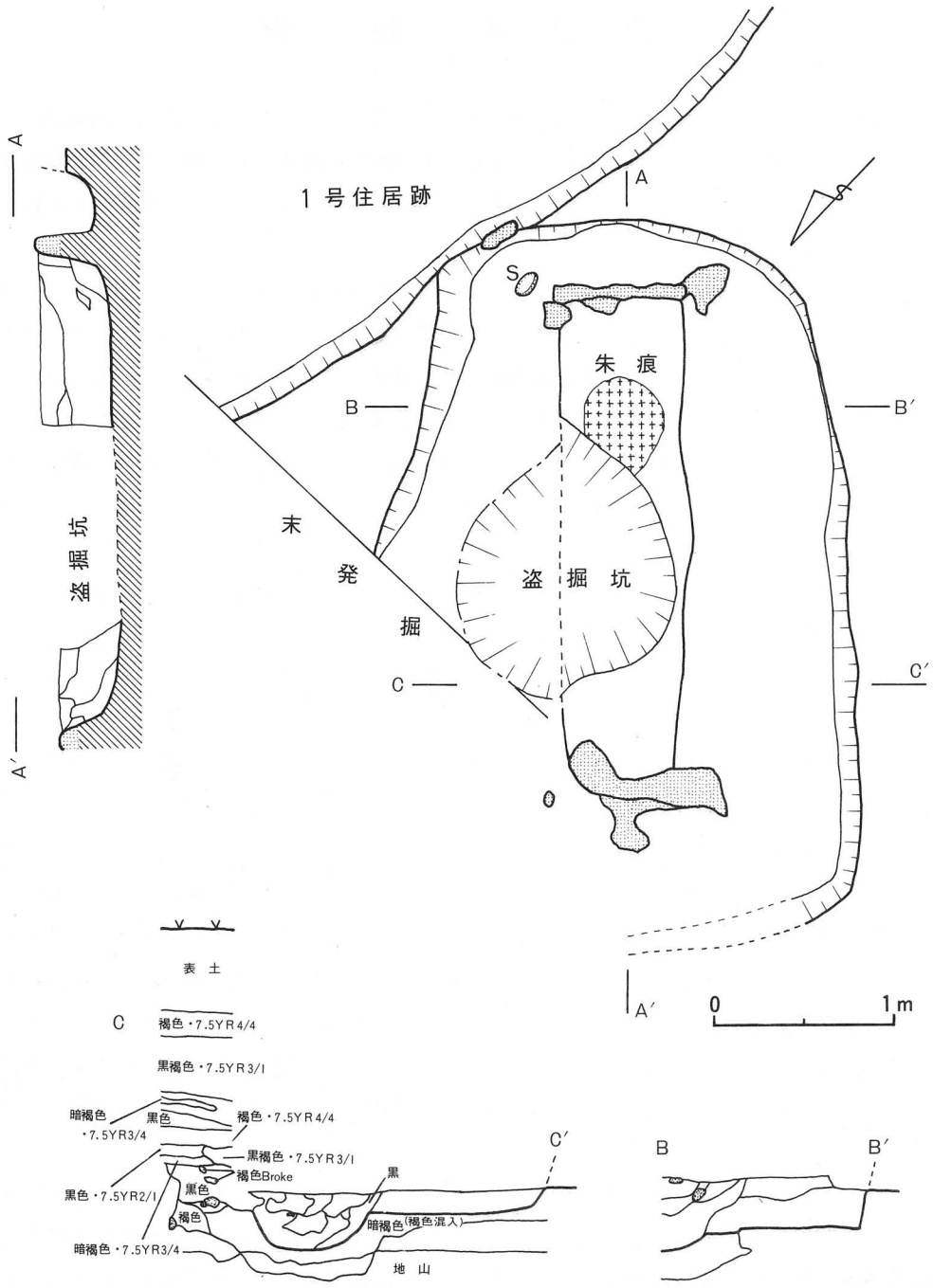
PI.12　埋葬主体部(検出時)

埋葬主体は、古墳の中心からやや南東に偏した位置にあり、主軸をS44°E とする。墓壙は、表土から約 1.5m 下の地山に掘り込まれていたが、東南端で弥生時代竪穴住居跡と接し、西北部では弥生時代土壙と重複し、その上墓壙のほぼ中央部が径 1.6m ～ 2 m 程の盗掘坑で乱されているなど、その原形の全体像の確認は複雑なものであった。調査の結果は、Ⅳ層黒色土層下面から墓壙が掘り窪められ、北西～南東長軸の長さ約４ｍ、幅約 2.5m を測るものであった。深さは、Ⅴ層暗褐色土層の上面から約10cmで、Ⅳ層黒色土層からの掘り込みは約20cmを越えるものと思われる。

PI.13　埋 葬 主 体 部

内蔵された木棺は割竹形木棺で、壙底中央主軸線上に長さ 2.7m 、南東端幅 0.7m 、北西端幅 0.6m 、深さ約20cmを測る断面U字形を呈する狭少な壙を穿ち、安置する場所を設置している。両小口面だけを黄白色の粘土で固め、粘土槨の簡易な形態をとり、南東端から北西端にかけては高低差10cm程の傾斜が認められ、又東南部には薄くではあるが朱の痕跡が認められていることから、東南部を頭部として被葬されたものと思われる。

副葬品等については一切痕跡も認められなかった。



第25図　埋葬主体部実測図　（S＝1/40）

第 Ⅶ 章　結　語

今回の発掘調査で、持田中尾遺跡からは先土器時代から当初の目的であった古墳時代までの各時代の遺物と遺構が検出され、同遺跡のもつ地理的位置からも種々の問題を提起するものとなった。ここでは最近の県下の考古学的成果から各時代にそくして幾つかの問題を摘出してみたい。

先土器時代の県内の遺跡の在り方については、大野寅夫氏の採集遺物を茂山護氏が報告されたことにより、はじめて面的な広がりの中で位置付けを持ち得たといえる。それまで、県下の先土器時代の遺跡は、垂水公園遺跡、船野遺跡、出羽洞穴遺跡など10例程の遺跡が知られるのみで、まだ点的な位置の中で全体像を把握し難い状態にあった。しかし、先の報告により、児湯郡を中心とした限られた地域ではあったが、それでも30例程の遺跡が知られるに至り、その後部分的発掘ではあったが清武町辻遺跡などでも先土器時代の遺物が検出されはじめ、県下を被う形で先土器時代の追求が可能になりつつある。

持田中尾遺跡では、ナイフ形石器に類別を加えることになり横長の剝片を使用したいわゆる瀬戸内技法の流れを追認することが出来、又掻器ではラウンド・スクレイパーに県下での初見の資料を加えることになった。後者のラウンド・スクレイパーについては霧島山麓を中心とした鹿児島県でも出土例がみられている。

縄文時代については、本遺跡から得られた資料は限られており、かつ層位的な追求も遺跡のもつ特殊性からも成し得なかった。

弥生時代の遺構と遺物は、本遺跡のもう一つの主たる位置を占めるものであった。県内での弥生前期の土器の出土は、現在のところ板付Ⅱ式にはじまり、檍遺跡、新別府遺跡などがあるが、それから中期までを結ぶ土器にこれまで不明な部分が多かった。本遺跡出土土器はその意味で貴重な位置を占めるものである。本遺跡出土遺物の様相は鹿児島県入来遺跡と類似し、抉入り片刃石斧、扁平片刃石斧などの石斧、三日月型石包丁などの組み合せはこの時期の特徴であろう。今回の調査で検出された土器は瀬戸内地方との密接な関係を示すものが大半を占めており、先土器時代から一貫して瀬戸内地方との交流関係が持続されてきたとみるべきであろう。

古墳時代では、確認された円墳の埋葬主体部からは、盗掘ですでに失われたものと思われ副葬遺物を得ることが出来なかった。しかし、検出された埋葬主体部は割竹型木棺を内蔵するもので、従来持田古墳群の内部主体については盗掘者の証言から推測された内部主体の構造の資料しかなかったがゆえに、発掘調査で確認されたことは有効であるといわねばならない。そして、こうして確認された内部主体が、割竹型木棺を内蔵しながら定型的

な粘土槨ではなく両小口面のみを粘土で固めるというように簡略化されていること、あるいは 2.7m という縮小された木棺の大きさなどに、時期差あるいは地域差を認めないわけにいかない。しかしながら、立地的には舌状台地の突端部を占地するという古い様相がうかがえ、東の舌状台地突端部に占地する48号墳（前方後円墳）に後出し対応する５世紀中葉～後半を考えておきたい。

持田中尾遺跡
発掘調査概要報告書

昭和57年4月30日発行

発行　高鍋町教育委員会

印刷　熊谷印刷株式会社